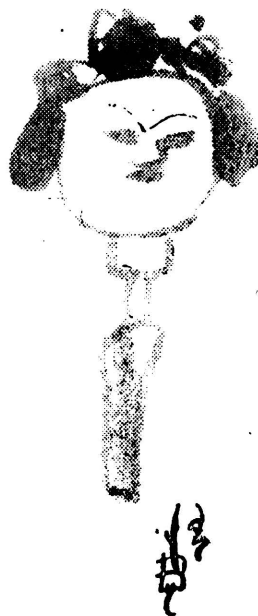


正本の包紙

祐田善雄



淨瑠璃の研究、別して近松海音等義太夫節初期の時代に目を注ぎ、その藝術に興味を抱く者に絶えざる光明と指針を與へられた、藤井紫影先生の「近松全集」と黒木勘藏氏の編になる「近世邦楽年表 義太夫之部」の學恩については今更茲に絮語する迄もないが、光祿の餘慶を浴びつゝ日夜學を進める曹にとつて感ずる義務として、瑣細言ふに足らず落脱拾ふに要なきものにも注意を向け、補遺に力を致すのも強ち無駄ではあるまいかと思ふ。

これより述べようとする正本の包紙については黒木勘藏氏も炯眼夙に瞻目凝視之を久しうしてゐられたものであつて、茲に初めて紹介されるものではないが、包紙といふ性質上比較的殘存する可能性が尠く、その上番附の如く根本資料となり得ない羸弱性が潜んでゐる爲、從來餘り省みられなかつた。正本を包んで賣出す包紙に刷込んである太夫附、それが研究の上に役立ちほしまいかと思はれるのである。よしんば番附程詳密でなく、整然としてゐない難を抱懷してゐるにしても、他にこれに類ふべきものとしては風本と繪盡しかない以上、又風本と繪盡の現存するものが極稀である現狀に於ては、かゝる包紙の太夫

附も當時の實際を知る一つの補助資料と認めてもよいであらう。かゝる資料はよし零細省る價值なきかの如きものであつても「外題年鑑」増補、「聲曲類纂」の類と違つて、その根本資料たる點に往時の遺影を駐め、信憑し準確すべき確實さがある。今「近世邦樂年表」を見るに

享保三年正月二日

壽の門松

頼母、大和、文、家、政

享保三年七月十五日

曾我會稽山

頼母、大和、文、家、政

享保四年八月十二日

平家女護島

頼母、大和、澤、國、政

享保五年八月三日

雙生隅田川

頼母、大和、澤、國、丹、治、政

享保十二年正月十五日

敵討御末刻太鼓

政、文、式、喜、大和

と記してゐるのは包紙によつたものであらう。かゝる包紙の太夫附がもつと多く知られたならば、恐らく近松の作品を演じた太夫の動向がよく窺はれ、延いては芝居としての状態がどんな有様であつたか、といふ本來の、文學に強引されざる、演劇の姿として最も重要な基本事項に觸れる事になりはしまいか。

既に書證によつて竹本座も豊竹座も外郭の圖は紹介されてゐる。それによつて櫓や勘定場、鼠木戸、高場を初め、略々外觀だけは當時を髣髴せしめるものを知られてゐるのである。又手摺の方は大略紹介されて來たし、書證も残つてゐる。正本も當時の儘が残されてゐる。とすればそれを語つた太夫、生かして客を聚めた往時の有様を知りたくなるのは當然の事であらう。それに最も必要なのは番附である。現に享保七年六月江戸辰松座上演の際の古番附が知られてゐるし、今後博搜する事によつて幾多の番附が出てくるかもしれないが、現在の處、番附によつて近松海音の時代を知る事はまづ及びもつかない。之に反して繪盡は比較的多くの資料があつて種々の事を教へてくれる。部分的には繪盡によつて初めて解決のつくものがあり、當時の芝居の姿を如實に書き、恰も芝居の解説書である事が反つて利便であるが、眼に映じた形象を主情的に整へる意圖が急であつて、太夫の有様を知り難いのもどかしい。繪盡については近石泰秋氏が名古屋の「國語國文學研究」第四、五輯に發表してゐられるし、その示唆によつて數多くの繪盡の存在が分つて來たが、ともあれこれによつて晩年の近松海音の時代の様子が多少とも分明になつてきたのは大きな喜びである。この上に包紙の太夫附を資料として加へたいと思ふ。例へば繪本の中の畫や小説隨筆の類の中で斷片的に書遺されてゐる瑣細な資料の收輯も忘却すべきではなく、否、蒐集は努むべきであるが、剛次の參

考資料に止まるのであつて、是に比すれば包紙の太夫附の方が數等資料として勝る。番附、繪盃、繪入木等に次ぐ資料價值があり、時として是等をも凌駕する。もし正本が最も信憑し得るものと認めるならば、それを包んで同時に賣出した包紙の刷物も信憑するに足るのは當然の事であらう。

かくして私は包紙を考勘資料として茲に提起する。かゝる考察の下に注意して外題年鑑を見るならば、次の諸事項が何か特別な根據を以て一樂子を書いてゐるのに氣附くであらう。

大内裏大友眞鳥

此節政太夫、大和太夫、文太夫、式太夫、喜太夫等相勤む。

享保十年九月十八日

芦屋道滿大内鑑

此節義太夫、式太夫、和泉太夫、喜太夫、七太夫、常太夫等勤む。

享保十九年十月五日

鎌倉三代記

今年太夫本上野少掾、藤原重勝と受領す。此節は喜世太夫、萬太夫、文太夫等相勤む。

享保三年正月二日

頼政追善芝

此節源太夫、喜世太夫、左内等勤む。

享保九年二月一日

その他明和の外題年鑑には次の補遺がある。

嵯峨天皇甘露雨

此節の太夫竹本頼母、内匠理太夫、竹本政太夫、豊竹萬太夫、竹本文太夫

正徳四年十月十五日

右の記述は享保年代迄の外題年鑑註記の中節事景事、道行の出語及び太夫の進退を除いて摘出したものであるが一樂子が何か根據あるものによつて書込んだといふ推測にして誤なきならば恐らく包紙の類によつたのでなからうか。太夫を書並べてゐる順序よりしてかく推定するのであるが、明和本に増補して太夫附を記入したのは恐らく包紙の太夫附を發見して挿記したものであらうと思ふ。

かく考ふる時、太夫附のある包紙の發見こそ太夫研究の一つの指針となる事に想例する。

包紙と同じ性質のものに道行類の綴本の表紙がある。三丁位の薄い本で、恰も常盤津や清元、長唄の本と規を同じうするものであつて、道行とか景事の類を丸本よりそのまゝ摘出綴合したものに表紙を附して估賣してゐたのである。これは比較的注

意されてゐないし、薄いもの故亡失し易いが、極稀に見受ける事がある。この表紙に太夫附が記してあるのである。

右の包紙と道行本表紙を掲げ参考に供したいと思ひ、前者を「大經師普曆」(表紙繪参照)より撮り、後者を「井筒葉平河内通」(十二頁繪繪参照より採つて本誌に掲げた。いづれも近松のもので、版は高麗橋一丁目正木屋山本九兵衛であり、竹本座の紋を見ても初版當時のものである事が推斷出来る。共に七行本の表紙である。

兩者を比較しても分るが、大體この版には一つの型式がある。中央に外題を記し、左右上部に紋を附け、右紋下に太夫座本を書きその下に太夫附がある、左紋下には版元が印してある。包紙には枠割があり、後には種々裝飾的なものも認められるに到つた。

この二種類の表紙がもつと數多く集ればどんなに淨瑠璃研究に裨益するであらうかと考へて、少數ながらも標本的に拾集してゐたのであるが、加島屋の版木が天理圖書館の藏に歸するに到つて、その中に數多くの表紙の版木がある事を知つた。比較的古いものも多いので、番附現存の稀な享保以前のものを中心にして紹介しようと思ふ。

加島屋の版木は傳來の正しいものであつて、正本研究を云爲される方は是非一見を薦めたい。竹本豊竹の正本は延享五年仲間申定にある如く、前者は山本、後者は西澤が版權を握つてゐたのであつて、その板株によつて出版し一般に流布したのであり、以後その版木を版權と共に傳承して加島屋に到り現在に及んでゐるのであるから、近松海音を始め古淨瑠璃の長板に至るまで各種の版が含まれ、實に見事なものである。これについては「話」第一卷第三號及び大阪毎日新聞昭和十年三月廿三日、「日本文化」第十四號によつて世に紹介されてゐるが、本質より言へば當然因會に收藏さるべきものとして豊竹古靱太夫氏が奔走されたといふ事であるが、その勞空しく結局天理圖書館の有に歸したのである。

とまれ加島屋の版木はその性質及び傳承経路の明白にして最も信據し得るものであつて、他日整理の曉には幾多の資料も出るかと期待されるものである。

一例を挙げると、安永二年正月九日「達模様愛敬會我」は「邦樂年表」に正本出ですと記してゐるが、この版木がそのまゝ藏されてゐる。これは「増補富士日記葛蒲刀」の改題で、單に外題を改めるのみならず、極些末な入木があつて、恐らく版に刷れば知らずに見逃すであらうと思はれるのが、明瞭に判別出来て系統を明かにする上に便利である。版木の根本資料になる所以は埋木にある。入木の摘疎は刷上げた正本に依據する事の不安心なるを教へてくれる。異版本云爲も結構だが、同じ版の入木改變を知る事も亦縦の系統を知るに便利であり、史的展開を鮮明にしてくれる。

これらの諸點については版本整理の上に發表されるであらうが、その中包紙及び道行景事本の表紙について、左に列叙しよう。

表紙の版本は夥しく多數に上り總べてを紹介したのであるが、或ものは現在番附の遺つてゐるものと重複するのみならず太夫附の觀點よりすれば表紙の太夫附は番附に劣るからこれらを除く意味を以て竹本座は播磨少掾時代、豊竹座は享保年代迄で打切る事にし、その代りに單に版本の太夫附を羅列するに止めずして「邦樂年表」その他で補へる部分はこれを併記して今後の研究に資する料にし、爾後の發見、追加増補を俟ちたいと思ふ。但し景事道行等の出語太夫や繪入細字本の類によるものは一切省く事にして整理を行ひ體裁を備へた。

上演年月日(邦)

正徳二年三月四日

外題名

紋下

大夫附

けいせい掛物揃

竹本筑後掾直傳

紋 外題ノ上中央ニ一ツノミ

多川源、頼母、左内、和哥竹政(包)

【再演カ】

せみ丸

竹本筑後掾

紋 外題ノ上中央ニ一ツノミ

多川源、頼母、佐内、和哥竹政、大和彦(包)

正徳四年四月八日

相摸入道千疋大

竹本筑後掾

多川源、頼母、佐内、和哥竹政、大和彦(包)

正徳四年十月十五日

音曲百枚笹

【嵯峨天皇甘露雨ト同時上演】

多川源、頼母、和哥竹政、大和彦(正本)

正徳五年春カ

大經師昔曆

竹本筑後掾

多川源、和哥竹政、大和彦、文、頼母(包)

紅葉狩劔本地

竹本筑後掾

多川源、和哥竹政、大和彦、文、頼母(包)

正徳五年十一月一日

國性爺合戰

頼母、内匠理、政、豊竹萬、文、浪花(譜)

【説十五日】

【再演カ】

嵯峨天皇甘露雨

頼母、内匠理、政、豊竹萬、文(外、明)

享保二年十一月十六日

聖德太子繪傳記

太夫竹本筑後掾

頼母、大和、文、家、政(包)

享保三年正月二日

山崎與次兵衛 壽の門松

座本竹田出雲掾

頼母、大和、文、家、政(邦)

享保三年七月十五日

曾我會稽山

太夫竹本筑後掾

座本竹田出雲掾

享保四年二月十四日

本朝三國志

太夫竹田本出筑後掾

、頼母、大和、澤、國、政（包、表二）

享保四年十一月六日

けいせい嶋原蛙合戦

太夫竹田本出筑後掾

頼母、大和、澤、國、丹、扇、政（包）

けいせい酒吞童子

太夫竹田本出筑後掾

頼母、大和、澤、國、丹、扇、政（包）

享保五年三月三日

井筒業平河内通

太夫竹田本出筑後掾

頼母、大和、澤、國、丹、扇、政（包、表二）

享保五年八月三日

雙生隅田川

太夫竹田本出筑後掾

頼母、大和、澤、國、丹、治、政（包）

享保五年十一月四日

日本武尊吾妻鑑

太夫竹田本出筑後掾

政、文、頼母、國、大和（包）

河内國姥火

太夫竹田本出筑後掾

政、文、頼母、國、大和（包）

享保六年八月三日

信州川中島合戦

太夫竹田本出筑後掾

政、陸奥茂、國、新、大和（包、表）

享保九年十一月四日

右大將鎌倉實記

太夫竹田本出筑後掾

政、文、式、常、喜、大和（包、表）

享保十年五月九日

出世握虎稚物語

太夫竹田本出筑後掾

政、文、式、常、喜、大和（包、表）

享保十年九月十八日

大内裏大友眞鳥

太夫竹田本出筑後掾

政、文、式、喜、大和（外）

享保十二年正月十五日

敵討御未刻太鼓

太夫竹田本出筑後掾

政、文、式、喜、大和（包）

享保十二年八月一日

三莊太夫五人嬢

太夫竹田本出筑後掾

政、文、式、喜、大和（包）

享保十三年五月廿三日

加賀國篠原合戦

太夫竹田本出筑後掾

政、文、式、喜、大和（包、表二）

享保十四年六月十八日
〔二度目〕

新板大塔宮

太夫 竹本 出 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

政、文、式、喜、大和（包）

享保十四年十一月廿五日

京土産名所并筒

太夫 竹本 出 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

政、文、式、喜、佐、大和（包、表二）

享保十五年二月十五日

三浦大助紅梅約

太夫 竹本 出 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

政、文、喜、佐、大和（包）

享保十五年八月一日

信州姨捨山

太夫 竹本 出 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

政、文、喜、佐、大和（表）

享保十五年十一月十五日

須磨都源平躰蜀

太夫 竹本 出 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

政、文、喜、佐、大和（包、表、番）

享保十六年五月五日（外）
四日（番）

國性爺會戰

太夫 竹本 筑後 掾

政、文、喜、佐、大和（番）

享保十六年九月十三日（外）
十二日（番）

鬼一法眼三略卷

太夫 竹本 筑後 掾

政、文、喜、佐、兼、大和（番）

享保十七年六月八日

伊達染手綱

太夫 竹本 出 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

政、文、喜、佐、兼、大和（表）

享保十七年九月九日

壇浦兜軍記

太夫 竹本 出 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

政、文、喜、佐、兼、大和（表）

享保十八年七月十五日

卯月紅葉

太夫 竹本 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

政、和泉、喜、佐、兼、文（包）

享保十九年十月十五日

重井筒容鏡

太夫 竹本 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

義、和泉、七、内匠、式、常、喜（外）

享保二十年九月十四日

甲賀三郎窟物語

太夫 竹本 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

和泉、七、内匠、式、常、喜（包、番）

元文元年二月一日

赤松同心緣陣幕

太夫 竹本 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

和泉、七、内匠、式、常、喜（包、表、番）

元日金年越

太夫 竹本 筑後 掾
座本 竹田 出 雲

和泉、七、内匠、式、喜（包）

【再演カ】

娥哥かるた

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 上總少掾
竹本 上總少掾

和泉、七、内匠、式、喜（包）

元文元年五月十二日

敵討襦襖錦

和泉、七、内匠、式、喜（邦、番）

元文二年正月廿八日

御所櫻堀川夜討

【入木カ】

和泉、七、内匠、式、喜（包）

元文二年十月十八日

太政入道兵庫岬

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

和泉、式、喜、七、美濃、内匠（包）

元文三年正月廿五日

行平磯馴松

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

和泉、式、七、此、内匠（包）

元文四年四月十一日

ひらかな盛衰記

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

内匠、七、此、志摩、八十、式（表、番）

元文五年四月十一日

今川本領猫魔館

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

内匠、七、此、志摩、式（包、番）

元文五年七月一日

將門冠合戰

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

内匠、七、此、志摩、式（包、表、番）

元文五年十一月十一日

戀八卦柱曆

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

内匠、七、此、志摩、式（包、番）

寛保元年正月十四日

伊豆院宣源氏鏡

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

内匠、志摩、紋、百合、此（包、表二）

寛保元年五月十六日

新うすゆき物語

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

内匠、志摩、紋、百合、此（番）

ひらかな盛衰記

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

内匠、志摩、文（紋）、百合、此（譜、番）

寛保二年二月十四日

花衣いろは縁起

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

此、紋、百合、西、志摩（包、番）

寛保二年四月十七日

室町千疊敷

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

此、紋、百合、西、志摩（番）

寛保二年七月二日

男作五雁金

太夫 竹本 筑後掾
太夫 竹本 播磨少掾
太夫 竹本 筑後掾

此、紋、百合、西、志摩（番）

寛保三年四月六日

入鹿大臣皇都評

太夫竹本筑後掾
太夫竹本播磨少掾

此、紋、百合、七、志摩（包、番）

寛保三年十月廿五日

大内裏大友眞鳥

太夫竹本筑後掾
太夫竹本播磨少掾

此、紋、百合、志摩（包）

延享元年三月六日

兒源氏道中軍記

太夫竹本筑後掾
太夫竹本播磨少掾

此、紋、百合、政、弦、鳴（包、番）

延享元年十一月十六日

八曲筐掛繪

太夫竹本筑後掾
太夫竹田出雲掾

此、紋、百合、政、錦、柚、其、鳴（包、正本）

竹本播磨少掾の死及びその追善を以て竹本座の分は一應打ち切りたいと思ふ。（邦）は邦樂年表、（番）は番附、（譜）は淨瑠璃譜（外）（外、明）は外題年鑑及びその明和本、（包）は包紙、（表）は道行景事の表紙で（表二）は表紙二種を示す。番附は右掲以外のもも猶存するし、所在を知りつゝ尋ねる暇持たなかつたので氣に懸りつゝも省略したのもあるが右の表によつて大體知り得るから、補遺を後日に期待して博搜するの日又は示唆を賜らん事を希む次第である。

猶太夫附の附してない包紙が若干ある。

百日會我、十二段長生嶋臺、會我扇八景、傾城反魂香、姫山姥、天智天皇、博多小女郎波枕、酒吞童子枕言葉等

これらには竹本座の紋が据つてゐる。

次に目を豊竹座に轉じてみる。

西澤版の包紙の残存は山本版の竹本座に比して遙に少い。

享保三年正月二日

鎌倉三代記

上野、喜世、萬、文（外）

享保四年正月廿日

義經新高館

上野、喜世、萬、文、源、左内（書入）

坂上田村麿

豊竹上野少掾

喜代、和泉、久米、今、嶋（繪巻）

享保九年二月一日

頼政追善芝

豊竹上野少掾
藤原重勝

喜代、久米、和泉、倉、三和、嶋（包）

享保十一年四月八日

北條時頼記

上野、喜代、源、和泉、新（譜）

享保十三年五月十五日

南都十三鐘

豊竹上野少掾

和泉、森、伊織、新、品(包)

頼政扇子芝

豊竹上野少掾

和泉、森、伊織、新、品(表)

享保十五年五月六日

本朝檀特山

豊竹上野少掾

和泉、森、三和、伊織、新、品(包)

享保十六年正月二日

源家七代集

豊竹上野少掾

和泉、森、三和、伊織、新、品(包)

享保十八年七月十六日

莠伶人吾妻雛形

豊竹越前少掾

河内、伊、丹、湊、要(包)

享保十九年正月二日

北條時頼記

豊竹越前少掾

河内、伊、信、湊、要(包、番)

享保十九年六月一日

曾我昔見臺

豊竹越前少掾

河内、伊、信、久米、湊、要(包)

享保十九年八月十三日

那須與市西海祝

豊竹越前少掾

河内、伊、信、久米、湊、要(包)

右の表は風本を始め道行景事の用語のみに名を記してあるのは除いたが、これによつて近世邦楽年表を多少とも増補し得るに止まらず、繪巻、正本の類を参照すれば、從來知られざる事項を教へてくれるやうに思はれる。

通常「吉野都女楠」を七行大字本に刊行した事が七行本の始とし、爾後これより以前の當り作をも七行本に再版したと言はれてゐるが、この説は版木の包紙より考察すれば肯肯し得るのである。

包紙の左に「大字七くどりけいこ本」又は「七くどり大字けいこ本」とあつて、七行の稽古本なる事は明瞭であるが、太夫附のない「百日會我」「十二段長生嶋臺」「會我扇八景」「傾城反魂香」「天智天皇」等の七行本の包紙は、正徳元年九月十日の女楠以後に再版したものと推定して誤なからう。換言すれば山本九兵衛が、從來の細字本及び八行本を七行に改刻出版したも



に延寶の頃、この芝居主竹田の座元に替りし時、櫓幕の紋所竹亀甲にかはりて、今も西の芝居は此櫓幕を用ふ。其紋所相似たるが故、今竹本の流を汲る上りり語、竹亀甲を竹本の紋所ぞと心得て、衣類、肩衣、見臺等へ付るもの多し。そは古き操の番付、竹豊故事、其餘古きものを見て知るへし。

齋藤月岑も既に氣付いてゐた如く、竹本の紋所は鞠挿に笹の丸である。それがいつしか竹亀甲に變つたが、月岑は竹田が座本になつた時だと推定し竹田の紋所に改めたとなすのは誤である。竹田出雲が竹本座の座本になつたから紋所を改めたのではなくて、年代はずつと降つて、「埴浦兜軍記」の享保十七年九月九日の包紙迄は鞠挿に笹の丸の紋所が続いてゐるのであつて享保十八年七月十五日「重井筒容鏡」になつ、初めて竹亀甲に移つたのである。以後今に至るも竹本座は竹亀甲と考へ、文樂座でも竹亀甲と丸にトヨの組合せの紋を使用してゐるが、本来竹本座の紋は鞠挿に笹の丸である事は「今昔操年代記」に認めてゐる通りである。紋所を變更したのは享保十七年九月より十八年七月迄の間、大和太夫、文太夫等が竹本座より姿を消した

のと認められる。恐らくその頃再び舞臺で上演された爲に或は世の流行となつてこれを出版して賣出したものであらう。之に反じて太夫附のある包紙で正徳元年九月十日の女補以前に出版されたと認められるものがないといふ事實は、「外題年鑑」に一樂子が言ふ如く、女補を以て七行本の嚆矢と考へてまづ誤謬のない事を證明してゐると思はれる。

次に座の紋の位置及び形態に二三異同がある。比較的古いもの若干には中央外題の上に一ケの紋があるに反し、後のものは全部誌上圖版の如く左右二ケ附いてゐて、その位置、個數は問題でないにしても、紋所の形態には注意を拂ふべきものを認める事が出来る。

「聲曲類纂補遺」に

竹本義太夫（後、筑後掾）が紋所は、鞠挿に笹の丸也。然る

頃と考へられる。紋所の變更には何か理由が潜んでゐると思ふが、この事實が種々の事を教へてくれるから、今後の參考資料となる。

略々同時に豊竹座も紋が變つてゐるのである。篠の丸から丸竹又は丸にトヨに移り、現在では全く丸にトヨを豊竹座の紋と思込んでゐるが、古くは「今昔操年代記」にある如く篠の丸である、豊竹座の紋を見るに、享保十六年正月二日の「源家七代集」迄は篠の丸であるが、享保十八年七月十六日「芳俗人吾非雛形」以後は丸竹にトヨと變つてゐるから、享保十六年正月以後享保十八年七月迄の間に紋を改めたのであつて、竹豊兩座が略々同じ頃紋を改めてゐるのは何かの事情が介在してゐるものと考へたい。

その間顯著な事象としては、享保十六年九月三十日に豊竹上野少掾が受領して豊竹越前少掾藤原重泰となつた事と、享保十八年三月十二日に大和太夫が歿し、六月卅日に竹本座が類焼した事が大きな事件であるが、恐らくこの頃より次第に新しい機運が熾熱して上野少掾政太夫の對抗が極點に達し、淨瑠璃界殷賑の上昇へと向つて行つたのであつて、恰も紋所の變更が一つの新機運を暗示してゐるかのやうに思はれる。それには大和太夫を始め諸太夫の舉措進退を年表に作つて調べると、その中に幽微ではあるが時勢の動きを握み時人の嗜好を臆度出来るものを感じられる。徒に長くなるのでその一々に觸れないが、播磨少掾政太夫について述べてみよう。

政太夫の事蹟は從來知られてゐるやうであつて、實際は餘り判つて居ない。資料としては「音曲口傳書」「今昔操年代記」「竹本播磨少掾浮圖」「文正翁曲帶塚」を始め、墓碑、句碑、扇碑の類が知られてゐるが、案外誤傳を犯してゐる口碑があるやうである。

「音曲口傳書」は播磨少掾が口授したのを弟子順四軒が實録したもので明和八年の跋があり、安永二年出版してゐるから、最も信憑し得るものであるが、その中に「正徳四年甲午九月一日筑後掾六、四歳にて身まかりぬ遺言にして義太夫となり名跡相續し」といふ記事があつて、すら／＼と讀めば政太夫が筑後掾の遺言によつて歿後直に筑後の位置に代つて一座を統御したかの如く誤解され易いが、政太夫が遺言によつて後年に及んで義太夫を尊名したのに過ぎない事は、續積川貫が延享元年七月廿五日播磨少掾歿後まだ遺言重る九月十四日撰文の「竹本播磨少掾浮圖」の中で「翁爲其筑後掾一高爲究其闕奥遂繼其緒竹本氏雲號義太夫皆由於其遺言」と書記してゐる如く、筑後掾の遺言は然るべき後継者があれば義太夫の名を譲る事を述べた

だけであらうと思はれる。それ故に筑後掾歿後約廿年経過して二代目竹本義太夫を襲ふてゐるのである。

然るに之に對し、「一聲曲類纂」では「正徳四年甲午九月遺言して名跡相續なさしむ。享保十九年甲寅遺言によりて二代の義太夫と改め一たとなし、「増補淨瑠璃大系圖」は「筑後掾の跡を嗣四の座の座頭役を勤むる」と次第に進化し、政太夫が竹本座の座頭役となつて、筑後掾歿後の一座を牛耳つてゐるやうに解釋されてきた。それが最近の論說では正徳四年筑後の歿後座本の竹川出雲と作者の近松門左衛門は、筑後生前の意を體して、櫓下太夫として政太夫を推し、同年十月筑後の跡を嗣いだ政太夫は和哥竹を竹本と改姓し、「嵯峨天皇甘露雨」を上演したが、頼母、理太夫以下はよく後進の政太夫を助けたと説かれてゐる。

座頭役とか櫓下太夫とかいふ名稱はその頃のものでないにしても、筑後掾歿後果して諸説の如く政太夫が一座の筆頭に位して筑後の跡を統率し得ただらうか。正徳四年は政太夫廿五歳、和哥竹政太夫を稱して竹本座の床を勤めた正徳二年より筑後の死迄僅に二年半、歸り新參、別して竹本座には殆んど那染のない若い政太夫が筑後の息のかゝつた鐙々たる太夫の中に伍して座頭役に坐る事は想像し難い事である。この點に兼々不審を懷いてゐたのであるが、右の年表を見る時その疑問は氷解するであらう。

右表で順位を定めると、多川源太夫、竹本頼母、竹本左内、和哥竹政太夫、大和彦太夫、竹本文太夫となつて、略々正徳二年の筑後生前より正徳五年の筑後歿後に至る期間の太夫附が明かになる。この順位より後繼者を選ぶ時果して和哥竹政太夫に自羽の筋が立つであらうか。その後間もなく多川源太夫と竹本左内は豊竹座に走つた。かくして混亂が起り、その補強として内匠理太夫、豊竹萬太夫を入れて竹本浪花と蓋を明けたのが「國性爺合戦」であるが、この時の筆頭は竹本頼母であつた。頼母あつての竹本座であり、頼母なれば一座を統べる事は出来る。永年筑後の傍を離れずに居て師風をよく飲み「ふしは先生がくつさめまでをのがさず、聲に愛有つて淨瑠璃美しう語りなし、どこやら筑後よりうまい所あり」と批評されてゐる新町四口の頼母なれば、筑後縁門弟次第の筆頭に位してゐるから、駈出しの政太夫より上席に坐るは當然の事であつて、頼母が一座を率ゐるのは順序であるが、多川源太夫や竹本左内が豊竹座に走り、竹本頼母が政太夫、彦太夫、文太夫等の若手を傘下に收めて豊竹座と對抗し奮戦してゐる有様は竹本座危機に處する背水の陣であつたに相違ない。竹本左内は筑後掾の甥で筑後生寫しとも再來とも持映された人であり、二代目筑後を嗣ぐ人であるが、世評芳しからず、筑後歿後竹本座に踏止る事なく豊竹座に

赴き終は江戸下りをしたと言はれてゐる人である。とまれ源太夫方内等が去つた竹本座は頼母を中心とした若手の一座であつたが、頼母政太夫のファンビを安泰にし今後の目處を決せしめたものは「國性爺合戦」の成功であつた。辰松八郎兵衛の應援を求め、若き政太夫に配するに若き三二を以てしたが、この時の番附（天保元年初刻による）を見るに頼母は太夫、目盡し、二ノ口、九仙山景事と華やかな場面を語つて非常に奮闘してゐる。往昔は筆頭の太夫が太夫を語り最も多くの場に出演するのが常であつて、特に景事道行等大衆に口吟まれ親しまれてゐるものは主として座頭役が語つてゐるのである。通常太夫、景事、三ノ切、道行類を筆頭の太夫が一人で語るが、聲量の少いものは太夫、二切、三切、四切を語つてゐたのであつて、太夫は必ず座頭役の太夫の持場であつた。元文頃より次第にその風が頼れ、座頭役が太夫よりその名を削るやうになるが、「國性爺合戦」で太夫及び景事、四切その他最も多くの場に出演してゐる竹本頼母は一座の頭梁であつた。國性爺の成功は頼母を中心とした若手の連中、別して花形で三ノ切を語つた政太夫等の勝利であつた。頼母を頭に頂いて、政太夫等が奮闘した期間は享保五年八月三日「雙生隅田川」迄続くのであるが、その間大和太夫を始め若手の面々が活躍する反面、近松は年々新作を物してはその傑れた表現と巧みな構成とを以て名文に魁了せしめずには措かぬ圓熟さを示し、座本竹田出雲掾も若手の太夫を巧みに操縦して興行界に雄飛したのであつた。「雙生隅田川」に續いて享保五年十一月四日「日本武尊吾妻鑑」を出し、「河内國姥火」を演じたが、この時には頼母は座頭役より退いて政太夫に譲り、後見のやうな位置に坐つてゐる。その後間もなく頼母の名が消去つてゐるから、享保五年末頃より病氣か何かで隠退したのではなからうか。享保六年五月の門弟次第には頼母の名が政太夫の上席にあるから、享保六年五月より八月の間に頼母が歿した爲か全く淨瑠璃界から姿を消して了つたのである。とまれその後竹本頼母は竹本座より退いて竹本政太夫の時代になるのである。

享保六年八月三日「信州川中島合戦」の時に至つて始めて政太夫は座頭役として後見の應援なく自ら中心の一座を興行したのである。時に三十二歳。東の芝居では享保三年豊竹若太夫は上野の口宣を嗣いで上野少掾藤原重勝と名乗つて櫓を持つやうになり、道頓堀で堂々と興行して東西に對峙してゐる。嘗ては芝居株を有たす曾根崎新地の僻陋の地で僅に氣を吐き心を癒してゐた若太夫が、道頓堀の芝居株を握り一時的な借芝居でなく堂々と豊竹芝居の本據をこゝに据えて興行する勢は恰も昇天の有様であつたから、自然これに對抗する政太夫側の若手はともすれば壓され勝ちの羽目に陥る折もあつた。享保七年四月六日に豊竹座で海音の「心中二ツ腹帯」を出したのに對し、近松は早速筆を走らせて「心中宵庚申」を書き、廿二日より竹本座の

手招に掛けたが、豊竹座に人氣が揚つて敗北に歸したといふ苦澁を嘗めはしたものゝ、政太夫の側も近松や出雲の援助を得て次第に地盤を固め人氣を博するに至つた。

かゝる時に竹本座が被つた打撃は享保九年三月廿一二日の類焼と十一月廿二日の近松の死であつた。かくして竹豊兩座とも新しい機構と陣容を以て拮抗相譲らず双方必死の技倆と技能を争つたのである。享保十二年正月刊「今昔操年代記」を以て政太夫の評を窺はうと思ふ。

豊竹上野少掾と竹本政太夫と比較する時前者の方が上位にある事は年代記の記す處であるが、それを表現するに、上野少掾は太夫本、政太夫は筑後替りと書いて筑後掾を太夫本と見てゐるやうである。

政太夫は中もみや長四郎とて、いまだ角前髪（つん）の頃より音曲を好み、あけくれ筑後風に心をよせ、まんまと淨瑠璃に成し頃、豊竹京にて芝居興行の節、西澤この仁を招き、京都に同道仕、若太夫方にて勤める。京を仕舞一座のこらず大阪にくだり、新地會根崎の芝居にて、若竹政太夫と名をあらため兩年勤め、三年め出雲方へ生まれ、段々淨瑠璃實のり功者と成り、今西の芝居にて筑後替りとならるゝは、日音曲に心かけふかき故、諸人稱美する事お手柄。

竹本政太夫は中紅屋長四郎といつて若年の頃より淨瑠璃が好きで、早くより筑後の風を嗜んだ。淨瑠璃秘傳丸には長四郎の名は見えないが、後に筑後の弟子となつて専ら勤み、寶永七年正月には門弟次第の中に長四郎の名が見えるやうになつた。

その年京都へ豊竹座が巡業に出た際西澤一風が長四郎を招いて芝居に出演せしめたのである。一體、豊竹采女事若太夫が筑後の膝下を離れて獨立したとはいふものの、櫓株を持たぬ悲しさには興行をする毎に櫓を借るか、櫓免許不用の小芝居に立籠るより方法がなかつた。道頓堀の小屋で出演するには芝居小屋を借らねばならず、師匠の筑後に張合ふ事も出来兼ねたであらうし、所詮道頓堀以外の櫓株不用の芝居に本據を置いたのである。新興隆盛の地會根崎の芝居は既に歌舞伎の大名題も出演してゐるし、新しい遊興の場所として次第に榮えて行く有様であつたので、豊竹座がこの地の小芝居へ出演しつゝ巡業の手を打つのは此に宜に適した處理であらう。京都巡業より歸つた豊竹座は新地會根崎芝居で興行したのであるが、その際中紅屋長四郎を改めて若竹政太夫と名乗つた。時に年二十一歳。會根崎芝居で兩年勤め、三年目の正徳二年三月四日竹本座に出演し、前「傾城掛物掬」切一丹波興作」に出演したといふ。その時の太夫は顔觸れは前掲の如くである。かくして若竹若しくは和音竹の姓を稱してゐたのであるが、正徳五年末頃之を竹本に改めた。通説によれば和音竹を竹本に改め座頭役を勤めるやうにとの筑後掾遺言によつて、筑後の歿後直に改姓し「嵯峨天皇甘露雨」に出演したと説いてゐるが、この説には賛成し難い。上掲年表

にある如く、「外題年鑑明和本所掲の太夫附が包紙等による根拠ある記載であるならば、あの太夫附は再演の際のもの考へざるを得ない。筑後掾歿後、「音曲百枚篋」「大經師普磨」「紅葉狩劍本地」を和邦竹政太夫の名で演じ、正徳五年末「國性爺台戦」「嵯峨天皇甘露雨」の頃に竹本政太夫と改めたのであつて、通説の如く遺言によつて座頭役になつた爲竹本と改めたのではないのである。否座頭の位置には上位の頼母が座つたのである。享保五年霜月になつて政太夫は上席に据り一座を統率するに至り、茲に漸く竹本座の基礎と共に政太夫の位置も定つたのである。「段々淨瑠璃實のり功者と」なつて行き、遂には「今西の芝居にて筑後替りとならるゝ」と言はれる迄になつたのも鍛錬の結果であり工夫を勵んだ報應であつた。日頃淨瑠璃に専念した稽古熱心の賜であつて、筑後掾の遺言によつて直に廿有餘の若者が座頭役に座つたのでなく、その後數年の苦辛が報いられて「筑後替り」になつたのである。享保六年時に三十二歳であつた。

かくて「筑後替り」と稱せられた政太夫は當然現今の紋下即ち櫓下に相當する位置に居ただらうか。一座を束ねて總裁する權力を持つて居ただらうかの問題が起るだらう。

「今昔操年代記」を見ると、さうした意味に「太夫本」の語を用ひ、井上播磨、宇治加賀、竹本筑後、豊竹上野の四人を太夫本として隨處に書いてゐるが、政太夫は單に「筑後替り」と記して一段低い待遇であるのは、低く見られる理由が潜んでゐるからであらう。「筑後替り」として一座を束ねる位置を占め、興行に際しては太席を始め二切三切或は四切等主な場を一人で演じながら、「太夫本」と稱せられず、否一段低く見られるのはどうしたわけであらう。

これを解決する爲には番附や包紙の紋力下にある太夫や座本が一つの示唆を與へてくれるやうに思はれる。紋下にある太夫こそは四澤一風の言ふ太夫本に相當するのであつて、これについて今少考察を加へてみよう。

筑後掾が政太夫の將來を囑目し、大成の曉に義太夫の名を譲り、竹本座を委ねる意向を有ち、遺言を傳へた事は事實かもしれないが、結果論的な推斷より歿後直に政太夫が實權を握つたかの如く誤解する事より誤謬を犯し勝ちであるが、歿後直に實現したのではなかつた。筑後掾後竹本座は混亂時代の患に呻吟低徊せずには居られなかつた。頼母政太夫の時代に落着くまでの太夫の蠢動浮言こそ竹本座を揺振るものであつたが、幾多の経緯はあるにしろ、近松と出雲が頼母政太夫を中心に一座を引締めて竹本座の再出發を行はせたのは鮮かな手駒であつた。

上掲年表を見ると、筑後掾生前及び歿直後は猶筑後掾の名で紋下を埋めてゐる。これは生前竹本筑後掾が櫓株を有ち興行權を把持してゐる事を示してゐるのであつて、包紙に筑後名代の意味を表記すると共に、太夫本として一座を統御して寸毫の情

隙もなく采配を振つてゐた事、即ち名代と紋下即ち櫓下を兼ねてゐる事が明に諒解出来るが、享保になると、座本竹田出雲掾の名や時には包紙の左下に作者近松門左衛門が併記してある事もある。太夫竹本筑後掾とあるのは言ふ迄もなく筑後名代の興行權の所在を示してゐるのであつて、竹本座の存する限り筑後名代は必ず記してあるのであつて、生前又は歿直後は單に筑後掾單獨であつたのが享保以後座本や作者の名が加つた事は、明に芝居の弱體化を物語つてゐるのである。筑後が竹本座の中心であつただけその死によつて受ける打撃は大きかつた。筑後あつての竹本座であるから、その死に一時は進退去就に迷ひ唯茫然たるのみであつた。そこに補強工作を余儀なくせられる必然が惹起したのである。その爲には頼母政太夫のみに依據する事なく、座本出雲も作者近松も興行政策の第一線に現れて采配を振ふに至つたのである。紋の下に太夫竹本筑後掾座本竹田出雲掾の名が掲げられた。前者は名代であり、後者は座本である。名代は興行權の櫓株を示し、座本は興行の責任者である。筑後在世の頃は竹田出雲は財政的な收支に關心を持ち、演技の實際は全く筑後の責任に於て興行してゐたのであるが、歿後は太夫の統帥を始め興行に關する責任が出雲に歸せられるに至つた。作者近松の名も包紙に記されてゐる事は太夫の權利の後退であり、座本や作者の應援によつて一座を率ゐて興行して居た有様であつた。その間番附の形式上名代筑後掾のみの時もあるにはあるが、殆んどすべては名代と座本の名を掲げて居るのみであつて、一座を統御する現在の紋下即ち櫓下に當る太夫は書かれてゐない。單に名代と座本のみ書かれてある事は太夫の中に座頭役と認むべきものがなかつた事を示してゐる。座本出雲によつて代行してゐたと考へられるのである。然るに竹本政太夫が享保十九年二月義太夫を襲名し、享保二十年十一月上總少掾を受領し、元文二年正月播磨少掾を再受領するに及んで、紋の下の位置は變更したのである。

義太夫としては二代目であり、師の名を襲いなのであるから最も光榮であるにも拘らず、翌年上總少掾を受領し、間もなく播磨少掾を再受領したのは何故であらうか。受領とは何であらうか。淨瑠璃の採芝居創始の頃は若干名を限つて芝居を公許してゐたのが何時しか社會制度の充實に伴つて櫓株に變じ、受領口宣の繼承を以て株の權利としてゐたやうである。それ故元禄期には度々官權が口宣改を行つて株の權利を調べてゐるのであつて、當時に於ては掾號は一の格式であり權利であつた。竹本座の続く限りは筑後の名代で押通すにしても、新しく豊竹座を設けるには受領口宣が必要であつた。これなくしては櫓を掲げ得なかつたので、自然無櫓の小芝居か一時契約の借櫓で興行しなければならなかつた。豊竹座の初期興行はそんな状態だつたので、曾根崎芝居や旅興行が多かつた。その不自由を除く爲に豊竹若太夫は大阪道頓堀の櫓名代の上野を嗣いで東の芝居に立

範り、次第に名聲を擧げていつたのである。「外題年鑑」實曆本、「古今外題年代記」を見て享保三年正月二日、鎌倉三代記の際の上野少掾受領以前が不明になつてゐる事によつても、道頓堀豊竹座の出發がこの時以後である事を立證し、筑後死後の竹本座が「國性爺合戰」大當りによつて再認識されたのと規を一にしてゐる。とまれ掾號受領には椿株が附隨し興行權の隨伴があつた、政太夫が受領した上總少掾の名は虎屋上總少掾と同名であり、播磨少掾は竹本座の前身であり且義太夫が創始の折播磨少掾の借名代で興行してゐたといふ山縁も深い井上播磨と同名である。上總少掾は京都では一時絶えてゐるし、播磨掾も亦その名が失はれてゐたから、これらを襲名したものかもしれないが、然しかゝる掾號は嘗て豊竹若太夫が上總掾を襲つた如き椿株の權利の隨伴は政太夫の時には無くなり、單に有名無實となつてゐたのであらうと思はれる。社會組織の進展と株組織の充實に從つて芝居小屋の數と株數は一定し、所詮新芝居を興行する事は難しくなつた。かくして名代を嗣いでも興行する權利をもつだけで興行する事は出来兼ねる状態となつてゐたので政太夫は單に掾號受領のみに止つたと言へ、それによつて一座内部への睨みは遙に大きなものとなつた。享保二十年には名代の筑後と並んで竹本義太夫の名が見え、座本竹田出雲掾は位置が變つて左紋の下の方に押しやられ、明らかに政太夫の權利の向上と座頭役の貫祿を示してゐる。義太夫が上總少掾となり播磨少掾となるに従つて、全く彼の位置は強固なものになり、一座を十分に統率して竹本座の黄金時代を現出し、門下に多士濟々を集めて操芝居の最盛期を現出した。座本も作者も彼の下に位し、名代の筑後と對等の位置を占めた。嘗ては座本や作者の補強によつて竹本座を維持し、豊竹座に對峙してゐた政太夫も長年の艱難も報いられ、獨自の風を拓き、西の芝居を安泰なものにする事が出来た。時に四十四歳。現在言ふ處の紋下としての實權を握り、座頭の位置に於て名實兼備の名太夫として竹本座に君臨したのである。然るに延享元年七月廿五日五十四歳で死するに及び、紋下には又座本竹田出雲掾が坐らざるを得なくなつて危機を孕んだのである。播磨少掾については猶述べる事も多くあるが、それ等については後日整理したいと思ふ。

以上、包紙、番附その他の資料によつて播磨少掾の一面を述べたのであるが、包紙や表紙の類が示してくれる事實は猶多角的な觀察によつて仔細に點檢する時、今迄氣附かなかつた新事實に想到するであらう。よし若細省る價值なしとする程のものであつても、注意の向け方で生きてくるものだと思つてこゝに紹介し併せて包紙と番附、繪盃、正木によつて太夫を整理し、補助資料によつて太夫中心の操芝居史を考察する事こそ、丸本研究と並行して必須なる所以を力説する次第である。